

けにします。唐が滅んで宋が建国され、朝鮮半島では新羅が滅んで高麗が朝鮮半島を最終的に統一するという中で、日本の国は、石上英一さんがこういう言葉を使って説明しています。「積極的孤立主義外交政策」を取っていると「一九八二」。どういうことかというと、観念的には中国と同等、朝鮮（高麗）よりは優位に立つ、そういう建前を保ちながら、国と国との正式な外交関係を結ばないという外交方針である、一言で言ってしまうとそういうことです。そういう政策を取ることによって、防衛拠点という意味での鞠智城の役割もだんだん減っていくことになります。鞠智城は一〇世紀には廃絶するとされていますが、その役割はだんだん低下していくことになっていったのだと思います。

文献の史料から鞠智城そのものには迫れなかったのですが、周りの状況というか、その中でもう一度考え直してみてもどうかという問題提起ですので、後でまた討論などのときにご意見をいただければと思います。ありがとうございます。

パネルディスカッション



まず、一つ目の岡田さんの話は多岐にわたるもので、私も初めて伺った内容もあります。岡田さんは約五〇年前の鞠智城の最初の頃の調査からずっと関わって現場も見えてきたということですので、鞠智城の調査・研究の長い歴史も感じるわけですが、それをだいたい頭の中に入れておられるということ

本日は一時から始まりまして、四名の講師の方の大変充実した内容の詰まった講演を聞かれて、ご来場の皆さんにおかれましては、頭がいっぱいになっておられると思います。鞠智城をテーマにして、まだまだくめども尽きない、いろいろなテーマが出てくるということで、私も大変興味深く拝聴していました。多岐にわたる内容について、これから約一時間、パネルディスカッションをして、さらに深めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

さて、全体的なパネルディスカッションの章立てとして、基調講演あるいは講演の三名の順番からいくと、岡田さん、赤司さん、加藤さんの講演の主なテーマに沿って、一つ目は岡田さんの講演にあ

りました内容を少し深めていきます。二つ目は赤司さんの建築から見た鞠智

城という課題の中身をもう少し深め、三つ目は加藤さんの話にありました平安時代の鞠智城をどう評価するかということについて議論をしたいと思っています。それぞれの話の中で、西住さんにこれまでの調査成果との整合性について話をさせていただくことにしたいと思います。

まず、一つ目の岡田さんの話は多岐にわたるもので、私も初めて伺った内

容もあります。岡田さんは約五〇年前の鞠智城の最初の頃の調査からずっと

関わって現場も見えてきたということですので、鞠智城の調査・研究の長い歴

史も感じるわけですが、それをだいたい頭の中に入れておられるということ



コーディネーター紹介

佐藤 信 (さとう まこと)

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は日本古代史。文学博士。

パネラー

岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）

赤司 善彦（福岡県教育庁総務部文化財保護課長）

加藤 友康（明治大学大学院文学研究科特任教授）

西住 欣一郎（歴史公園鞠智城・温故創生館長）

で、私は素晴らしいと思いました。本日のお話の中では、新しい見方、知見を幾つか提供していただいたように思います。その中で四つ程の新しいテーマとして、ここで特に他のメンバーの方のご意見も聞きたいと思ったことがあります。そこから始めたいと思います。

最初は、今日の基調講演の中で私も驚きましたことで、鞠智城の創建が大野城や基肄城よりも以前に、対隼人の政策の中で造り始められて、それが後に白村江の敗戦を踏まえて、対外的防衛機能を持つようになったのではないかということを言われたと思います。その点について深めたいと思います。その場合、今までは大野城・基肄城と合わせて、『続日本紀』に初めて名前が載って六九八年に修理されたという記事がありました。恐らく大野城・基肄城と同じように鞠智城も白村江の敗戦の後の対外的防衛のために造り始められ、約三〇年たって修理が必要になった三つの城が『続日本紀』に載ったのだらうと考えてきたわけです。それ以前の造営ということは意外な感じがしたのですが、岡田さん、その段階での隼人との関係は、背景として何かお考えはありますか。

岡田・・

本日は考古学の話だから、文献史料がない時代について想像たくましく話そうということを覚悟して話しています。実は大野城、基肄城は出てくるのに、鞠智城の造営の時期がなぜ史料に出てこないのか。大野城、基肄城と並んで、文武天皇二年に出てきながら、創建については何も書いてありません。なぜ出てこないのだろうと、まずそれが一つの疑問でした。

それからもう一つは考古学の土器の編年の問題です。明らかに大野城、基肄城とともに造られたと考えられる六六五年前後よりも以前の土器が出てきています。これをどう考えるのかというのがもう一つの問題です。ただし先ほどお話ししたように、古い土器があるからといって、その時代に造られたとは断言できないのです。考古学の場合には、古い時代のももの後の時代まで使われることがありますから、それだけでは肯定できないのです。

鞠智城の貯水池の報告書の断面図を示せばよかったのですが、報告書を読んでいたことを前提にしますと、貯木場のところでは各時期のものが層位的に出てきていることが報告されています。貯木場のところで、瓦の出る包含層より一層下に、須恵器しか出ない包含層があります。そこから出てくる須恵器は明らかに古いのです。ということは、瓦が使われる以前に鞠智城が既に造られていたということを経位的に証明しているのではないかと。考古学では、層位は型式に優先するという言葉があります。型式的に土器をどうだこうだというよりは、層位が実証できると。しかも貯水池の場合には層位がきちんと残っているわけだから、これは古く考えてもいいのではないかと。それを結び付けて、なぜ鞠智城が大野城や基肄城と一緒に出てこないのかというのは、実は既に造られていたからです。既にあった城だからこそ出てこないのです。要するに鞠智城が古いということを、実は語っているのではないかと。

同時に築城とは言っていないのです。鞠智城については築城の記事はもちろんありません。最初に

出てくるのが「繕い治む」です。築城と書いているものについては、西日本の古代山城だと理解しています。「城を治める」と書いた場合には、大部分の方が、明治時代から「修」と書いたら修繕、修理だというように読んでしまうのです。実は「修」の字については「つくる」という意味です。「つくる」は、新たに「つくる」でも「つくる」なのです。修理だとは何も書いていません。それを修理ではなくて「つくる」と読んでもいいのではないかと。

それについて付言しますと、高安城を築城した二年後には修理をしようと、修しようという言葉が出てきます。これを修理だと考えると、わずか二年で修理しなければいけないのかと。しかも天智天皇が高安城に上ったときに「修しよう」と言ったが、民の苦しみを思っ、そのときはやめた。その年の冬に修したと。つまりこれも「つくれた」と読めば読めるわけです。それで何をしたかというと、倉庫を造っています。倉庫を造ったということが書いてあります。それから二年後にも修してつまり造って、塩と米を入れる倉庫を造ったと書いてあります。いずれも高安城の中の倉庫群を造った記事です。そう思えば、三野城、稲積城についても、「修」はそういう意味ではないかと思っただけです。

鞠智城を造り始めて、その翌年には三野城、稲積城を造り、さらに二年後に、唱吏国つまり薩摩国に柵を立てて成を置いた、兵隊を置いたという記事が出ています。これも関連して考えると、鞠智城の修理を、繕い治めてから、その後日向国と、後の大隅国に対して城を造って、さらに薩摩にも造っ

たというように読めるのです。そう読んでみますと、大隅も薩摩も日向も政庁、国府の発掘調査がろくにされていません。恐らく発掘をして、すぐ真下にあるかどうか知りませんが、その周辺で城柵的な施設が出てくる可能性があります。それが出てくれば、三野城であり稲積城だろうと考えます。全体の中で鞠智城の以前にそういうものがあり、それが南九州の統治のための前線本拠地が鞠智城だったという性格に結び付くのではないかと考えたわけです。

佐藤

鞠智城の創建については、白村江の敗戦直後の対外的な危機に対応するため、防衛のために造ったという機能と、もう一つは南九州の隼人対策での機能ではないかという二つの機能が考えられるわけです。それに関するただいまの話は新説かなと思います。

西住さんは発掘調査をされた立場から、例えば鞠智城の創建直前のあり方、あるいは七世紀後葉ではなくて中葉にさかのぼって造り始めたのではという点について、ただし岡田さんも白村江の後は国防的な機能もあるのだとお認めだと思いますが、調査された立場からはいかがですか。

西住

私も調査をしているときから築城の記事がないということに非常に疑問を持っていたわけです。本日、岡田先生のお話をお聞きして、そういうことであればスムーズに理解ができるというように、私個人的にはありがたい見解をいただいていると思います。調査を担当した者としては、鞠智城の価値

がさらにレベルアップされているということで、今後に期待を込めたような先生の講演を聞かせていただきました。

遺物の面から挙げますと、岡田先生のご指摘のように、七世紀後半よりも前の遺物は確かに存在します。古墳時代の集落に伴う遺物もありますが、七世紀の第1四半期、第2四半期の遺物は確かに存在しています。岡田先生の説を、自分もそうのように考えたいと思う根拠に遺物の古さが一つあります。以前から言われていたのですが、鞠智城がある肥後国の国庁というか国府が、隼人対策にも関連してくるだろうと思います。鞠智城ができたのは、熊本为国府がはつきりいつからとは分らないのですが、通常一般的にいうと、早くても八世紀中ぐらい、後半ぐらいですので、それ以前の姿が鞠智城には国府に類する役目があるのではないかとということを日頃考えています。そういうことを考えると、岡田先生の隼人対策、管理的な建物がある鞠智城Ⅱ期にできたものも非常に理解しやすいのではないかと、個人的にそのように思います。

佐藤・・

肥後の国府は、変遷が考えられていますが、遺跡がみつかったているのは熊本市のJR熊本駅の西側辺り二本木地区で、鞠智城からは少し離れています。そうした国府ができる以前の機能を想定できないかということです。私の知る範囲では、鞠智城を創建した時期の大きな集落が、鞠智城の南側の台（うてな）台地にあり、鞠智城を造るのに参加した地元の民衆の人たちの墓かもしれないという横

穴群が台台地にあるということがあります。その時代の鞠智城のあった米原台地はどのようなものだったかという点はいかがですか。

西住・・

まさしく六世紀後半から七世紀前半にかけて、おっしゃられるとおり、凝灰岩に穴を掘って造るお墓が台（うてな）の近くにあり、県内で最大の数を誇っている瀬戸口横穴が鞠智城に近接したところにあります。それは鞠智城が造られる前の古墳時代の前半の段階で、追葬が八世紀まで入っているわけです。そうなってくると、鞠智城が造られた時代は重ならないかもしれませんが、追葬される、後からお墓にする時代は鞠智城と重なってしまいます。

佐藤・・

本日の講演でも、赤司さんから、大野城と基肆城、そして鞠智城の築城が、同じ建築方式でセットで行われたのではないかというお話がありました。赤司さんから見ると、本日の岡田先生の創建のご意見はいかがですか。

赤司・・

三つぐらいの問題があったと思います。一つは鞠智城の池の開削の問題です。確か二年前の鞠智城シンポジウムの折に、これは古くて、台地の開発と一緒に鞠智城の前身として、渡来系の人が行ったのではないかということを述べたことがあります。

大野城、基肄城と鞠智城が同時期かどうかということ、白村江以前にこれらは造ったと考えてもいいのだろうかということだと思います。大野城、基肄城、鞠智城の関係は、考古学的にどうかといわれると、倉庫建物の展開のしかたは一緒ですが、スタートラインが一緒かというのは分かりません。ただし考古学的にいうと、土塁の構造は鞠智城も大野城も、お城の周りに城壁をめぐるさせるわけですが、その九五パーセントは土塁、土を固めているわけです。その土の固め方や、下に石を置くなどの発想は一緒です。また限られた石積、城壁の石塁など石垣を造る技術などを見ても、それほど違わないという点では、ほぼ同じような技術と思想です。立地のあり方は、標高が全然違うわけですが、そういうところでは多分一緒です。門は型式的には一時期新しいのですが、建て替えの可能性もありますので、それは何ともいえないのです。今後古いものが見つかれば変わるかもしれないということです。だいたい同じ時期で、数年違うかどうかはここではわかりません。

築城年代はいつなのかということですが、古代史の人たちの解釈をそのまま受け入れられないのです。『日本書記』には、六六五年に白村江で倭国が負けた、翌年に水城を築いた、次に大野城を築いた。これには百済の達卒憶礼福留が関わった。だから一連の流れとしては、白村江で負けたので造ったのだということをおっしゃいます。私の同僚の古代史の人に「そんなことはないだろう。そんな簡単なものではない」と言うとき必ず「そう書いてあるのですから、解釈はそれしかないでしょう。古代史はそうです」と言うのです。考古学は違います。現場に立ってみると、どうも違う風景が見えるという

話をするのですがわかってもらえません。

その一環として、数年前に奈良の文化財研究所の方と共同研究をしました。大野城から、城門の木柱がそのまま出土しました。私は九州国立博物館にいましたので、その柱をCTスキャンにかけて、人間の中身を見るように輪切りにして、断層写真を撮って見て、年輪のあり方を調べてみました。年輪は毎年幅が違いますから、その変動を見ていくと少しずつ、詳細は省きますが、古いもの、出土したものの年輪を見ると、それがいつの時代かぴたり分かるような研究があります。それでやったときに、年輪の木柱はほとんど削られていない。その一番外側の年代が六四八年だったのです。白村江よりももっと前なのです。皮を何枚も剥いてるので、六五〇年としていいのではないかといいことで、これをどう考えようかと。これを古代史に聞きますと、多分水漬けにしていたのでしょう。しかし木材は水漬けをしないということが分かったのです。

私自身は、考古学的には大野城も六五〇年に造り始められており、怡土城などは一三年かかっていますので、白村江で負けてすぐに造るなどということはないだろうと。そういう点では、白村江の前から既に造り始めていたと。「築」と書いてあるだけですから、それは完成の年代であって、造り始めたのは、もっと前から準備をしていたと考えています。

佐藤..

岡田さんも、鞠智城を造り始めたのは七世紀中葉だと言われるし、赤司さんも、大野城は六五〇年

に造り始めた。その背景は、朝鮮半島における国際的な危機感と想っているのでしょうか。岡田先生、何かご発言を。

岡田.. 赤司さんに伺いたいのですが、先ほどの講演でも出てきましたが、大野城の主城原の瓦は、文武天皇二年以降ですか。つまり鞠智城のⅡ期以降の瓦だというお話があったので、そうだとすれば、私が言いましたⅠ期の前半と後半に分けて、Ⅰ期の後半が大野城、基肆城とともに鞠智城が山城の一部として造られ始めた時期だというように想定したわけです。そのころに瓦があるだろうと考えたのですが、瓦はそこまで古くならないのですか。

赤司.. 私は瓦を礎石の建物に載せたいということと、「繕治」の意味を考えると、機能が変わって、大きな倉を造るようになり始めたことを「繕治」と解釈をしています。ぎりぎり七世紀代の瓦ということで、大型の倉庫に葺いてみたかどうかと考えました。

岡田.. 私の仮説のある部分では、その辺は非常に微妙なところなので、築城年代が下がるかもしれない。そうすると、六六五年前後に鞠智城が造られたという今までの定説のほうに傾いてしまう可能性があると思います。ただし土器が古いことは確かなので、古い土器が出ていることからいえば、それ以前に既に

米原台地は使われていたということを示すわけです。

これは建物の配置の中ですが、Ⅰ期の細長い側柱の建物、倉ではない掘立柱の建物が、二つ重なるようにして出ていますが、これは兵舎ではないかと思っています。事実鞠智城では兵舎として復元されています。この段階での似たような兵舎というのは、八世紀の初頭に東北にもあるのです。多賀城にもあります。それから考えると、Ⅰ期の段階で兵舎風の細長い建物があるというのは非常に面白いので、つまりその段階に兵隊がいたということです。

西住.. 瓦の件でよろしいですか。瓦の件ですが、先ほど赤司さんとお話して、鞠智城から出土している軒丸瓦は非常に特徴的なつくり方をしています。通常の瓦は丸い瓦をはめ込んでつくる瓦当はめ込み式なのですが、ここで出土している軒丸瓦は既に半裁した丸瓦を合わせて造っています。大野城からそれと同じものが出ています。それは七世紀の後半、古い段階に持ってきてあるということで、古くできると思います。

佐藤.. そうなると、私も古代史を学ぶ者は、白村江の敗戦という非常な国家的危機の中でこれまで理解してきたのですが。水城にしても大野城、基肆城にしても、『日本書記』の記事から考えてきたのですが、それを考古学的な成果から幅を持って考えるべきかどうかということをもう少し検討しなけ

ればいけないという気がしました。考古学の方は『日本書記』の記事があるから六六五年とは考えないで、遺物から調査していただけるとありがたいと思います。

創建についての岡田さんの説は置きまして、もう一つ新しい見解を展開された中では、岡田さんの基調講演の中で、七二〇年に隼人が大隅国司を殺害したという事件で、大伴旅人が鞠智城へ来たのではないかというお話があったのですが、旅人は後に大宰の帥すけとしてまた赴任してきます。そのときも関係したかもしれないというお話がありました。加藤さん、この点はいかがですか。なかなか証明することは難しいことです。

加藤.. そうですね。残された史料からは確かに証明することは難しいと思います。

佐藤.. 私の記憶では、旅人は薩摩まで行っていないかもしれません。行っているような気がしますが。ただし最終的な段階では、暑い中を苦勞して戦ったけれども、旅人が先に都に帰って、その下の副將軍的な人たちが、現地にもう少し残って最後まで制圧しなさいという記事が『続日本紀』にあったと思うのです。それもふくめて、『続日本紀』の記事を検討する必要があると思いました。

それからあと一つ岡田さんのお話の中で気になったのは、大宰府の広嗣の乱の後、大宰府が解体させられるということが一時あったわけですが、それをⅢ期に土器がないこととリンクして考えられた

のですが、その点については西住さん、いかがですか。

西住.. 岡田先生が言われるように、遺物が非常に少なくなる時期です。前のⅡ期に比べて極端に少なくなるものですから、そこでは活動をやっていないのではないかと思います。建物はあったとしても、人がそこにほとんどいないような状況が考えられると思います。

佐藤.. 藤原広嗣というのは大宰の少貳でしたが、上官の帥だいにもいなかったので、大宰府現地でのトップになったわけですね。しかも藤原広嗣のお父さんの藤原宇合という人は、かつて大宰の帥でした。つまり以前の大宰府の長官だった人の嫡子が、しかも大宰府現地ではトップの役人としてやってきたということ、フリーハンドが効くようになり、九州の軍団兵士をすべて動員して、二万を超える軍勢で旗揚げをしたわけです。そのときに、岡田さんがおっしゃるように、鞠智城にストックされていた兵器や食糧も全部使ったかどうかは別にして、もしそういうことが行われたとしたら、大野城や基肆城にあった米や兵器も同じことになったはずだと思うので、それとリンクして考える必要があると思います。赤司さん、その点はどうですか。大野城、基肆城に、鞠智城のⅢ期のように土器がなくなっ

て活動をしていないという時期はあるのですか。

赤司..

分かりませんというか、もともと非常に少ないです。私は今まで、城は守ってはいますが常駐していないと思っていますから。何かするときの分の土器は出てくるので、そういう意味では大野城でも八世紀の後半や七世紀の末、幾つかの画期はあります。常駐しているということについては、本日は、なるほどそういう考えもあるのだなと思ったところです。

佐藤..

その点では、鞠智城が総合報告書の段階で、これまでに出土した瓦や土器をすべてチェックしていただき、それによって初めて古代山城の中で、人々が生活した宮みの痕跡としての土器の量からこういうことがいえるようになってきたわけです。他の古代山城でも、こういうことが分かるということになります。もともと赤司さんが言われるように、敵が攻めてきたときに緊急に逃げ込む城だということで、普段常駐していなければ土器は少ないということになると思います。

先を急ぎまして、次に赤司さんの講演のほうに移りたいと思います。赤司さんの講演の中では、大野城・基肄城における総柱の正倉の大規模な高床倉庫建物の規格性について、設計図が同じではないかという指摘で、鞠智城でもそれがいえるというお話だったと受け止めました。そのような点は、例えば他の山城、大野城・基肄城・鞠智城以外でもあるのですか。また、赤司さんは「長倉」といわれたのですが、一部では「法倉」という人もいます。そのような倉庫建物は関東地方にもあります。九州における正倉建物のような国家的な倉庫で、同じ設計図があるのであれば、それ以外の地でも使わ

ないかということが気になるのですが、その点、赤司さん、いかがですか。

赤司..

他ではありません。逆に言うと、大野城と基肄城と鞠智城は倉があるので、岡山大学の狩野久先生が言っていることですが、だからこそ『日本書記』に書かれたのだという、奈良時代以降も残されたということですね。私はなるほどと合点がいつているところです。

佐藤..

それは昨年このシンポジウムでやったのですが、「繕治」の証拠ということでもあります。『続日本紀』に「繕治」と書いてあるのは、統一性を持って大宰府が施工したのではないかということになります。そのことと併せて、中心的な建物として、方位が斜めの、現在ではこれを兵舎として復元している建物のことについて赤司さんは、むしろ行政を行う中心的施設ではないかといわれたと思います。その点は西住さん、いかがですか。

西住..

私も考えていなかったのですが、本日赤司さんの話を聞いて、確かに建物の配列を見ますと、直角方向に主軸がお互いになっていますので、今後そのような点も含めて検討しなければいけないという思いで聞いていたところです。可能性としてはないわけではないと思います。

佐藤.. 報告書では、もつと東側の米原集落の近くの道路を挟んだ辺りで、もう少し東北のほうでL字型に行政建物群があるのではないかという見解でした。それについて赤司さんは、平安時代に持つてこられたと思うのですが。

赤司.. そうです。このブロックはおそらく奈良時代の終わりから平安時代であろうと思います。それで、溝がその近くをめぐるという。これがセットであると、確かに中心的な建物という可能性はあるのですが、配置からするともう少しきちんとしておかねばいけないというのと、南側に倉の領域があるので、そここのところの取り付けがうまくいかなければいけないということ。それから南北に長いものが並んだのか、建て替えられたのか、非常に密集してあるということからすると、並びからいうと屋（おく）構造の、土間構造の、常に物品を出し入れするような倉が建っていたエリアで考えたほうがいいのではないかと思います。

佐藤.. L字型の管理棟的な建物群といわれるものの評価ですが、これまでこちらが管理棟的な性格だと考えていたのですが、本日の赤司さんの講演を受けて、これまで兵舎として見てきた長大な側柱の建物、方位がやや斜めになる建物の評価をどう考えるかということは、これからもう一度検討する必要があると思います。鞠智城内の管理棟的な建物にもいろいろなランクがあつて、二つぐらいあつてもいい

のかもしれませんが。併存した場合があつてもいいのかもしれませんが。赤司さんが中心建物といわれた建物がどれぐらい存続するか。掘立柱建物ということともリンクしてくると思います。

もう一つ、赤司さんは七世紀末に礎石式の大型の「長倉」という建物を持つてくるということで、これが今までの総合報告書とずれてきます。総合報告書よりも早めに持つてこられたと思います。この宮野礎石と呼ばれる四九号の総柱の長大な倉庫ですが、この評価について、赤司さんの新しいご意見、西住さん、いかがですか。

西住.. 実は、この調査で出土した遺物の中に、古い遺物も出土しています。だからその可能性はあるわけですが、総合報告書をまとめる中でも議論をしたわけです。礎石の建物の下にひよつとしたら、掘立が入っている可能性もあるという点で、礎石は同じ時期に持つていこうかということで、総合報告書の中ではしています。ただ遺物は古いものが出ています。先ほどの関連で、兵舎の横の東側の建物も、実は礎石の建物の下に掘立の建物があることが分かっているのですが、プランが分からない状況で保存をしています。そういうことがありますので、可能性としてはあるということを先ほど言ったわけです。

佐藤.. これは国の史跡に指定されている大事な遺跡ですから、上に礎石の建物があるときに、それを壊し

て下層を発掘するわけにいかないという条件があります。ただ最近ではレーザー探査など遺跡の調査技術はだいぶ進んできましたので、掘らないでも下層に何かあったかということを見つけることもできるので、いろいろな方法でこれからさらに詰めていただけたらいいと思います。

赤司さんのお話の中では、今の長倉なども、郡役所にある正倉院の場合と同じような倉庫であって、それを理由にして、対外機能よりも地域支配機能ではないかということをおっしゃったと思います。その点をもう少し説明していただけないでしょうか。

赤司..

状況として、特に八世紀に入ってくると、大野城の城門が軍事的な意味合いよりは、どちらかというと飾り立てる方向になり、規模も大きくなって、鬼瓦を屋根にのせるような荘厳化というか、威厳を保つ方向にいくと。そういう意味ではお役所的な方向に流れているのではないかといいことがありますが。先ほどから出ていた大宰府出土の木簡、S D 二三四〇とわれわれが呼んでいる天平年間の木簡と一緒に出ました。そこに「基肄城の稲穀を筑前・筑後、肥等の国に貸し与えよ」という、例の木簡の評価を、発掘調査でそれを掘った人間として、私もずっと考えていました。倉のあり方からしても昔は備蓄基地だということと怒られていたのですが、その方向というのも比重としては少し大きくなっていったのではないかと思います。

なぜそんな山の中に倉が置かれたか。大野城の場合は、確か記録に運ぶ人の話が出てくると思いま

す。先ほど水害の話がありましたが、平地よりもリスクマネジメントとしては山のほうが、もしかすると有利だったのではないかといいことです。

大宰府の財源のようなことも少し考えたのですが、今のところ大宰府政庁という平地の政庁あるいは周辺の官衙には倉が一棟もないということから考えると、大野城、基肄城、鞠智城も含めて大宰府の財源のようなものだったのではないかと考えている次第です。

佐藤..

次の加藤さんのお話に移っていききたいと思います。平安時代の鞠智城ということです。本日のお話の中では「兵庫の鳴動と対外的な危機」を結びつけられました、これもかつて鞠智城シンポジウムで濱田耕策さんが、九世紀の鞠智城は対外的な機能を持つのだとおっしゃったことがあります。兵庫の鳴動の際に、単に鼓が自動的に鳴ったとか、扉が振動したということではないことが、本日の加藤さんの講演でも明らかになったと思います。九世紀の古代国家は、兵庫が鳴動したらどうするかという点を、もう一度説明していただけないでしょうか。

加藤..

諸国でそういう事例があれば、国から中央に報告をするわけです。それを受けて中央では陰陽寮などで占わせたり、その結果、兵革、兵乱があるということが出れば、太政官符を逆にその地方に出して、警護をきちんとせよという形で命令を出すというルートになっていると思います。ですから

「鳴る」ということ自体を報告することは、対外的なことを意識しているところが重要なということがあります。

本日は全体として、先ほどの土器の消滅、そこから性格が変わるといふ、倉庫ということで最近是非常にそちらを強調されることが多いので、あえて挑戦的といふか逆の意味での兵乱といふか、対外的なところから見直してどうかということで報告をしたいという趣旨もありました。

佐藤・・

九世紀の『六国史』では、菊池城院には「つわものぐら」の、兵庫、武器庫があったということが文献的に確実なわけです。先ほどの話の、稲穀すなわち稲や米穀をストックしておく倉庫以外に、兵庫が九世紀にはありました。加藤さん、鼓が鳴るといふときの、鼓は何に使ったか、武器としてどういう性格のものかをお願いします。

加藤・・

鼓自体は他のもの、例えば「ほら」「大角」「小角」と同じで、集団戦法をとるときの一つの指揮のためのもので、当時は軍団兵士という大量の兵士による集団戦法で戦闘しますから、それを指揮するための道具ということになると思います。それが鳴っているということは、兵庫に置かれているということなので、多分兵士は常駐はしていないと思うのですが、何かあったときにそのものを使って対応するということで、兵庫に置かれていることはあるかもしれないということです。

佐藤・・

鼓は軍事的な命令を伝える指令を出すための、ほら貝などもそうですが、武器なのです。これは民間で持っていてはいけない性格のものです。それが鳴るといふのは、やはり兵革、戦争が起る予兆であると考えるのが普通で、その延長上で考える必要があると思います。その鼓は、戦場ではそれを鳴らして軍事的な指揮をするわけですが、鼓樓で毎日鳴らしたかどうかは考えなければいけないと思います。

「兵庫」と、赤司さんが言っていた三×五間、三×四間の倉庫との関係は構造的にどうでしょうか。「兵庫」の場合は側柱でもいいかどうかとか、そういうことを伺いたいのですが。

加藤・・

逆に、私はそれについて考古学の方に伺いたかったところなのです。つまり「倉」と「庫」というのは先ほど令の用語の説明をしました、今ある建物の中で、「倉」という米を収める施設の場合にはよく分かるわけです。例えば礎石高床の建物といふか。これとは異なって「庫」という場合にどのように考えるか。今発掘で出ている七二の建物跡の中でどのように考えたらいいかということ。

赤司・・

おっしゃるように、高床の四角い倉と、高床ではない平地の床が土間のようなものがあります。八角形のような構造の高床らしきものがあるということが分かっているわけです。礎石式の四角いも

のは、稲穀を入れる、もみの状態で、もみは種ですから長期間保存できるのです。白米ではありませんから、わざわざ脱穀して、通常は脱穀せずに穂苅をするだけでヒモで結んで貨幣の代わりにもなるわけです。それをわざわざ脱穀してもみ状態にして倉の中に納めていくことをやるわけです。それ以外の平地の倉の場合には八角形の少し高床があります。武具の中には漆を使っているものが多いし、鼓もそうかもしれませんし、湿気を嫌いますので、少し床を上げたほうがいいだろうと普通は思います。簡単には入れないようにしたほうがいいというので高床です。鞠智城の場合、武器武具を収納する高床で考えられるのは、八角形しかない。それは今後の課題ですが、そういうことも九世紀に考えられるのではないかと思います。

佐藤

八角形の建物が「兵庫」である可能性もあるということでしょうか。西住さん、いかがですか。

西住

鞠智城を発掘している者としては非常に厳しいですが、建物が火災に遭っている倉庫の場合に限って申しますと、Ⅳ期、Ⅴ期で来ている総柱の建物からは、火災に遭った跡から炭化したお米が出ていますので、それは確かにお米を入れていたということがはっきりいえると思います。ただ火災に遭っていない総柱の建物に何が入っていたかという点、考古学的なものからアプローチすることは非常に厳しい状況です。プラント・オパールという植物遺体を分析する方法もあるのでし

うが、なかなかそこまではいけないということです。

それからもう一つ、本日のお話で、律令の中に倉庫には水を回すのだという話が出ていたと思います。発掘する面がきちんと残っている、残っていないというのもあるかもしれませんが、礎石の整地面で溝が確認できる礎石の建物とそうでない建物があります。それは中身が違う可能性があるのではないかと思います。今日は聞かせていただいています。

佐藤

炭化米が出ないところに「兵庫」がある可能性があります。先ほど言った武器は、おそらく廃絶の段階では貴重なものだから外に運ぶと思うのです。そのまま残って腐っていくことはないと思いますので、なかなか難しいです。軍団は全国に置かれましたので、そこにはそれなりの武器庫があるはずですが、今まで発掘で明らかになった場所は一つありません。

加藤さんのお話の中では、有明海経由の新羅と日本の官人、あるいは民衆との間の交流が結構あって、その経済的な利益をめぐる争いからトラブルが起きることもあったということでした。一方で新羅の史料には海賊として出てくる場合もあったわけです。海賊と日常的交流が一体になっているというのが九世紀のあり方だということで、それを統一的に理解しなければいけないと思います。ただ単に対外的な緊張だけではなくて、一方では日常的な交流を非常に密接にやっているというのが面白いと思いました。それを証明するための考古学的な遺物が何かあるのでしょうか。鞠智城に限らない、

熊本県内のことでもいいのですが。

西住・・

なかなかその辺は難しいです。遺物が出るところはあるのですが、それが確かにそれと絡み合うのかどうかというのは証明が難しい問題だと思います。

佐藤・・

先ほど申し上げた国府に推定される熊本市の熊本駅西側の二本木遺跡群からは、九世紀代の中国製のかかなりレベルの高い陶磁器などが出土していたと思うのですが、九世紀に鞠智城もあったわけですので、そういう交流が物で証明できればいいと思います。一番有名なのは、七世紀代にさかのぼる百済製ではないかといわれる、銅造菩薩立像です。あとは瓦が朝鮮半島系だといわれていると思います。だいぶ時間が迫ってきました。時間がなくて四名の方の話をあまり深めることができなかったのですが、本日の話をそれぞれ聞かれて、今後の鞠智城研究の方向性というか課題というか、このようなことも問題になるのではないかということを、手短にお一人ずつお話しただけるとありがたいのですが。

西住さんのほうから順番にお願いします。

西住・・

今後、鞠智城の価値をさらに高めるためにお仕事を頑張っていこうと思いますので、本日、先生方

からいただいた貴重なご意見を基に、さらに今後未解明の部分をできるように頑張っていきたいと思っています。若い研究者が控えていますので、それを彼らに引き継ぐことも大事だと思っていますところ

赤司・・

実は今年が水城、大野城、基肄城の築城一、三五〇年の記念の年ということです。その一環としてこれを位置づけていただいているわけです。研究という話がありましたが、一、三五〇年記念事業というのは、一、三五〇年を記念することではなくて、一、四〇〇年に向けた取り組みの始まりであるという位置づけをしています。そういう意味では、十数年前にはあまり関心がなく、古代山城について皆さんはおいでになりませんでした。これほど大盛況になったのはいろいろな方々のお力だと思っています。ぜひ一、四〇〇年に向けて、また新たに関心を持っていただけたらと思います。ありがとうございました。

加藤・・

本日は考古学の最新の成果をいろいろ伺って、文献のほうも考古学との連携というか、私たちがそちらの情報を取り入れなければいけないのではないかということを痛感した次第です。例えば先ほどの大野城の柱が、年輪年代学の成果によって六五〇年ということになると、『日本書記』で書かれている、ある意味では『日本書記』の編者が描いた歴史像ということですが、それとは異なってく

る可能性があるということになる、それをどのようにもう一回文献のほうで受け止めて考え直すかということが必要になってくるだろうと思います。文献史学と考古学の連携を、今後ますます深めていく必要があるのではないかと思います。

佐藤

大野城の太宰府口城門の東北のコーナーのコウヤマキの柱根のことで、創建したときの掘立柱の城門の柱根が残っています。それを年輪年代学をかけて調査しています。法隆寺などでは文献から知られる建築年代よりかなり古く伐採されたという判定が出ています。一〇〇年ぐらい前の伐採というズレる場合もあるし、ぴったりの場合も他の遺跡ではあるということです。いずれにしても今後検討しなければいけないと思います。

最後に、岡田さんお願いします。

岡田

本日のシンポジウムでは、創建の問題だけが議論されましたが、先ほども取り上げられていましたが、実は八世紀の半ばごろに全く土器の出ない時期が約五〇年あります。これが何かということを、先ほどお話をしたわけです。これは藤原広嗣の乱に関連しているだろうと。同時に広嗣の乱によって倉の中ががらんどったというだけではなくて、そのときに鞠智城が本来持っていた、南を向いた本拠地だという性格が失われたのだと考えているのです。その辺をもう少し強調したほうがよかったか

なという気がします。

それから以降、次に文献史料に出てくるのは菊池城であって、難しい字の鞠智城ではなくなるわけです。その段階にどうして文字が変わったのかという問題です。これは私の考古学がやることではなくて、文献史料のほうで分析していただきたいです。私の個人的な考えとしては、その段階で八世紀の末ごろに、鞠智城は肥後国の所属に変わったのではないかと思っています。それまでは大宰府の直轄でした。大宰府の直轄のときは難しい字を使い、肥後国の管轄になった段階で菊池郡の菊池に変わったのではないかと密かに考えています。

また、延暦一〇年、七九一年に太政官符が出ています。太政官符では倉というのは火が出ると類焼すると。だから今後新しく建てる倉については、一〇丈、三〇メートル離せというものがあります。ただしそれまでにできているものについては、改築するときに広げよという太政官の命令が出ているわけです。鞠智城の倉についても類焼しているのは、明らかに太政官符の出ました延暦一〇年の後です。それまではまだ倉の中に、不動倉で穀物が入っていたから、そのままの状態で類焼したとすると、第Ⅴ期の倉はいずれも三〇メートル以上離れていなければおかしいのです。その辺で長者山の上にある倉については、本当にこれがいいのかなと若干疑問があります。

同時にもう一つは、現在の米原の集落の中に大きな礎石がありますが、発掘できないわけです。ただし米原の集落の中に、礎石に伴って焼け米が出たという話を聞かないので、これはⅤ期の倉ではな

いかと。つまりⅤ期になると三〇メートルずつ離していけば当然全面に倉を展開させなければ済まないはず。その一部が米原の集落の下にある礎石になるのではないかと、そういうことを密かに考えています。これはいずれ鞠智城の調査をされる方々で実証していただければありがたいと思います。

佐藤..

ありがとうございました。鞠智城が、難しい「鞠智」から今の菊池市の「菊池」にどのように変わったかということも含めて、まだ検討すべき課題があると思いました。

これまでのお話で、本日のパネルディスカッションを終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。